

(3) 現代都市における境界概念の意味論的考察

WHERE ARE 'BOUNDARIES' IN THE CONTEMPORARY CITIES ?

○近藤 隆二郎・ 盛岡 通・ 末石 富太郎

by Ryujiro Kondo, Tohru Morioka, Tomitaro Sueishi,

ABSTRACT: It is now widely realized that the sign plays a vital role in all human activities. The study of the sign and its function is expected to open an entirely new perspective in the analysis of structure of urban environmental-semantic.

A sign or symbol only acquires meaning when it is discriminated from some other contrary sign or symbol. When we use symbols to distinguish one class of things or actions from another we consciously create sorts of 'Boundaries' in a field which is 'naturally' continuous. The viewpoint of 'Boundaries' that were *doso-jin*, bridge, shrine, etc. in history are valid for how to realize what customs, other than verbal customs, can "mean"; the semiotics of cities.

In the contemporary cities, people changes 'Boundaries' into two forms; 'Eternal-Boundaries' and 'Temporary-Boundaries'. The former is created like the historic 'Boundaries' between normal as This World and abnormal as The Other World. The latter is created between "temporary-normal" where man can slip in for a time —hotel, bar, hospital, etc.— and normal as The Other World.

'Eternal-Boundaries' is disappearing because people can not feel that the abnormal is of special value; 'sacred' or 'with taboo'. In compensation for this we are creating a 'Temporary-Boundaries' that are individually cognized and are passing affairs for man in the so-called cities.

Keywords: Boundaries, Semiotics of cities. Ambiguity of boundaries. Reversal of boundaries

1. 問題の背景

1.1 意味論の必要性

現代の都市計画においては、ニーズをプランナーとして汲み取るとしても、工学的設計の主流は、人間をモノとして捉え、生理的機能によりうごくモノとして位置づけて計画に取り入れるという機能主義が占めている。しかし、「人間空間は常に意味するものであり、」¹⁾「感覚内容が存在するためには、客体が存在するだけでは不十分であり、主体からの意味づけを必要とする」²⁾のである。ここに、客観世界から主観世界という自己の回復を図ることにおいて、意味論の必要性が叫ばれている。また、意味論においては、＜意味づけ＞をすることにより「記号」を生み出しており、人は、絶えず文化のあらゆる面で行っているのである。この「記号」の分析によって、われわれは、その対象および文化の秩序あるいは虚構化された姿を把握することが可能であり、我々の＜意味づけ＞の仕組みと意義を解明できる。

1.2 なぜ「境界」なのか

歴史的な意味において「境界」には、この世とあの世という二つの世界の媒介性を明示する道祖神や地蔵などが祭られたり、その既成の秩序を維持しようとする「内」と無秩序あるいは新秩序をもって「内」を脅かす「外」との緊張を一時的に開放する「祭り」が行われたりした(図-1)。つまり、「境界」とはそれ自体、人々が文節化して創りあげたわけ隔てるための「記号」であり、意味論の対象としてはファッションや建築などよりも、都市のコスモロジーを把握することにとっては最も適切であると考えられる。

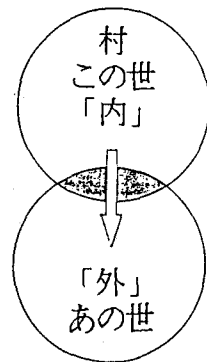


図-1 歴史的な「境界」の概念図

このように、過去の歴史において＜意味づけ＞されてきた「境界」を取り上げ、現代都市においてわれわれがどこに「境界」を産み出しているのかを分析することは、緊張している空間を明確にするとともに、現代都市における＜意味づけ＞の現状を理解し、さらにはその「境界」を通して主観世界の構築への手掛かりを探り、意味論の必要性を訴えることにもつながる。

2. 研究の構成と方法

2.1 本研究の構成

本研究の構成は、まず、＜意味づけ＞の仕組みを解明することに適用する記号論および構造主義の概念と方法を述べる。そして、歴史的「境界」にその方法を適用し、過去の＜意味づけ＞の方法を抽出する。その方法を現代都市に応用し、逆に都市における「境界」を導き出し、現代都市民の＜意味づけ＞の現状を理解し、以上のことから意味論の有効性を述べる。

2.2 研究の方法－構造の抽出

＜意味づけ＞とは、「記号」を生み出すことである。様々な「記号」の相関関係を分析することにより、その核ともいべき＜構造＞を抽出することが可能である。つまり、われわれの＜意味づけ＞によっても変化しない骨組みのようなものとして＜構造＞が存在する。＜意味づけ＞の分析対象としては、テキスト（創作者の意図による表現体）を用いる。ここで、「都市＝テキスト」として解釈する視点は、都市が発する様々なメッセージを、直接にあるいはそれを言語化したメタ＝テキストから解読する、という姿勢であり、図-2のように、都市を生きる、あるいは生きられた空間として把握することである。

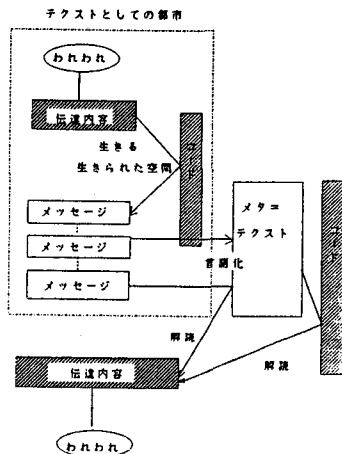


図-2 「都市＝テキスト」としての「解読」

3. 歴史的「境界」からの構造抽出

歴史的「境界」を研究しているテキストを取り上げ、分析することにより、「境界」の持つ＜構造＞を導き出す。そのメタ＝テキストとしては、文化人類学・民俗学・「無縁」論³⁾・「異人」論⁴⁾における境界研究を取りあげる。

3.1 文化人類学における境界

まず、その中心になるものとして、文化人類学における山口昌男の「文化－周縁」理論を用いる⁵⁾。「混沌こそは、全ての精神が、そこに立ち還えることによって、あらゆる事物との結び付きの可能性を再獲得することができる豊穣性を帯びた闇である。」として、その「混沌」が「周縁」－「境界」にあることから、

「内側における境界性の喚起と、そうして喚起されたもののフィジカルな境界（村境）への転移、そうすることによって『微あり』としての境界の強調」

という＜構造＞を境界が内包するという。これを当論文における＜境界＞（構造としての境界）とする。

3.2 民俗学における境界

民俗学において「境界」の一つとされている「橋」を取り上げ、その伝説（「淀橋」「一条戻橋」「幽霊橋」など）⁶⁾を構造分析することにより、その民間伝承の構造、

「人は境界によって異界と接触する」 ＜モデルA＞

が誘導できる。これは、＜境界＞から伝承として産み出されてきたものである。

3.3 「無縁」「悪所」論における「境界」

「無縁」の場合は、村の境としての「排除された場」から出現してきたのであり、初段階には＜境界＞という構造はみられるが、だんだんと有縁化することによって、その「境界性」は薄れていく。「悪所」論によると、＜境界＞を具現する場が存続して行くためには、芸能・風俗のような負性が必要であったことが読み取れる。

3.4 「異人」研究における境界

「異人」とは、境界を司る＜聖なる＞司祭＝媒介者であり、＜境界＞を具現する。

以上により、＜境界＞が、様々なテキストにおいて、その伝承・伝説を産みだしていることが把握できた。

すなわち、＜意味づけ＞として有効である。と同時にその分析軸として、両義性－AでもありBでもある、転換性－排除されるもの（ヴァルネラビリティ）から「境界」への移行により、最下位秩序を「超越した」「聖なるもの」へと転換する、という2軸が適切である。では、次に、この様な、人々に民俗を産みださせた＜境界＞性が、現代の都市ではどのようにになっているかへと視点を移してみよう。

4. 現代都市における＜境界＞の抽出

現代都市において＜境界＞を捉える場合、人がどこに闇を見るか、という視点が考えられる。闇は、混沌として意識され、その多義的イメージの可能性によって、人間の内的闇を喚起させるのである。では、現代都市において、人々はいったいどこに闇を見ているのであろうか。

都市は均質化を求め、その結果“無境界”というような現象になっているが、少なくとも人々の中には差を志向する心が存在するのである以上、全く闇がないのではない。過去の歴史において、その闇としての負性を発揮してきたのは「彼岸（死の世界）」であろう。妖怪・幽霊などのうごめく場であり、人々の恐れを一身に集めていた。しかし、墓がマンション化し、葬式がビデオ化されるにつれ、人々の死への意識はだんだんと薄れてきている。

現代都市における闇－それは海外に求められているともいえる。小松和彦は「かつて日本の国内で起きた都市と農村というような対立が、実は日本列島が“狭く”なった結果、日本と外国との間で起きているのである」⁷⁾と述べ、海外の「他界性」を示している。「東南アジア」という語から受けるイメージは、われわれにとって良いものとは言えないのである。経済の問題から始まり、“じゃばゆきさん”や農村の嫁としてアジアから娘が来たり、難民の問題など、新聞紙上にも負性を帯びて出てくるのである。逆に、このような情報によってアジアは闇へと向かっている。また、一部の若者が海外の旅行先としてアジアを選ぶという現象は、その闇への志向につながるものが現れている。

これとは別に、現代都市は週休2日が普通となり、レジャーブームおよびグルメブームとなっている。この風潮からは、「現実からの逃避」という一面が出てくる。すなわち、“一ランク上”の生活断片をもつこと“とっておきの”リゾートに行くことで、逆に現実生活を「外」にみるという図式が成り立つのである。すなわち、一定の秩序のある場に一時的に入ること、自らの現実をも含む日常そのものを一瞬否定（排除）するのである。このように「都市を闇としてみる」という図式も成立するのである。

そこに2方向の＜境界＞の捉え型がある。一つは、歴史的境界と同じように、死の世界、すなわち、絶対的な闇を捉える方向であり、同心円状の世界を持ったものである。もう一つは、現実を混沌として捉え、一時的に日常をはなれて仮の場に入り、そこから逆に自らを眺めるという図式である（図-3）。前者を「境界」、後者を「仮境界」とする。

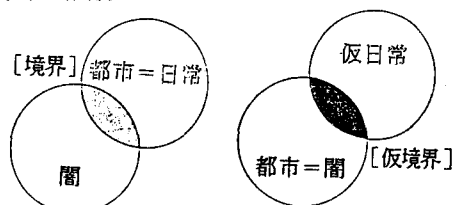


図-3 都市における「境界」と「仮境界」

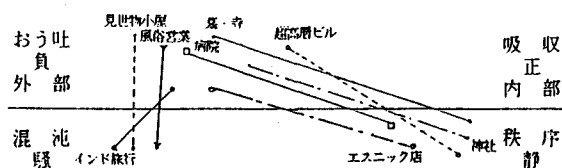


図-4 「境界」例における意味分析

「境界」の例としては、見世物小屋、風俗営業、墓、寺、神社、エスニック料理店、インド旅行、超高層ビル、病院、を取り上げる。そして、それらの闇の持つ属性を雑誌を中心にテキストを解釈し、その分解した要素別に、負性その強度によって分析したものが図-4である。強度は、テキストでの扱われ方から、相対的に評価した。これより、中間モデルが構築される。

4.1 「イッテシマエ」型 意味分析の「混沌・騒－秩序・静」軸により、「混沌・騒」的イメージを持つものであり、自らがその闇に行くことによって、その負の力に触れるという関係が存在するのである（図-5）。「見世物小屋」も「風俗産業」も、そ

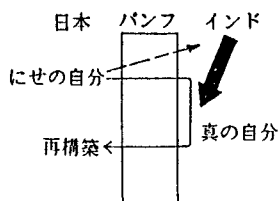


図-5 「イッテシマエ」型（インド旅行）における関係図

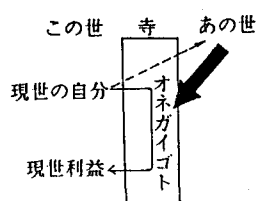


図-6 「オネガイゴト」型（寺）における関係図

の中に入るまでは、闇のイメージの立ち上がりを生じるが、[境界]を超えない限りはその闇性がこちらに進入してくることはない。また、このモデルは、闇をイメージさせる仕掛けを備えており、両義性は、闇への媒介性を強める方向にあり、転換性は、アニメ・マンガ等の二次元の世界に強くみられるのである。

4.2 「オネガイゴト」型 これは、逆に「秩序・静」的イメージを持つものであり、この世の自分はその闇の世界には行くことができないが、その入口としての[境界]に「オネガイ」することで、闇の力を受けるのである(図-6)。その媒介性を強調するために、強い秩序が存在し、転換性はすでに備えているものが多いが、両義性の衰退と共に、神聖性も弱まる方向にある。

[仮境界]の例としては、ホテルのロビー、BARの入口、ディスコのアプローチ、ラッシュ電車の窓、コンビニエンス・ストア(CVS)のドア、病院の電話、を取り上げる。それを「仮日常」へのイメージで意味分析すると図-7のようなになる。これより中間モデルが抽出される。

4.3 「カリソメ」型 これは一時的に「仮日常」に入り、その中から、「日常」を「外」に排除して、その差異性と両義性とが比例し、転換したものとしては、「夜景」のようなものが考えられる(図-8)。

4.4 「カエリタイ」型 「仮日常」として、病院、老人ホームなどに長期滞在している人にとって、電話機は「外」との接点であり[仮境界]である。そして、[仮境界]によって自らの「傷」を確認するのである(図-9)。それは、媒介として、多義的なイメージを生み、既に転換性を有している。

さらに、この[境界][仮境界]を両軸にとって各モデルごとの方向性を出したのが図-10と図-11であり、[境界]は矢印のような「イッテシマエ」型から「オネガイ」型への方向性を持っている。つまり、昔は「境界」として、闇への媒介性が強かった「墓」や「神社」といったものはすでに衰退に向かうものであり、現在では、「エスニック料理店」や、「インド旅行」がいきいきとしているのである。そこには、大きな流れとして、両義性から転換性という方向がある。一方、[仮境界]は、一時的な仮構の空間であるために、「境界」としての性質を高める差異性を大きくしなければならない。つまり、それを導く両義性が高まる方向にある。転換性は日常性をなくすことによって得られるのである。

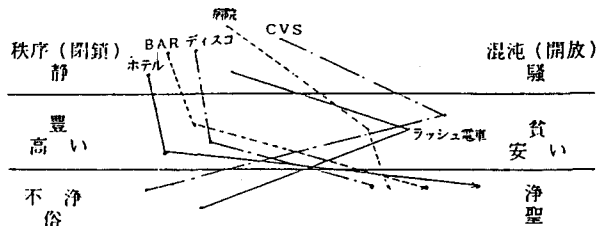


図-7 [仮境界]例における意味分析

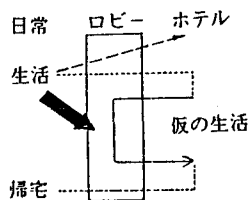


図-8 「カリソメ」型

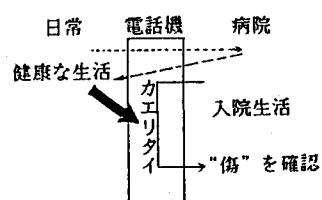


図-9 「カエリタイ」型

(ホテルのロビー)における関係図 (病院の電話機)における関係図

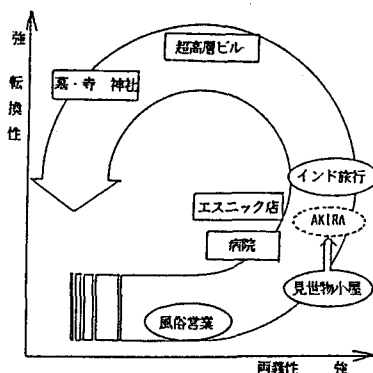


図-10 [境界]における両義性と転換性

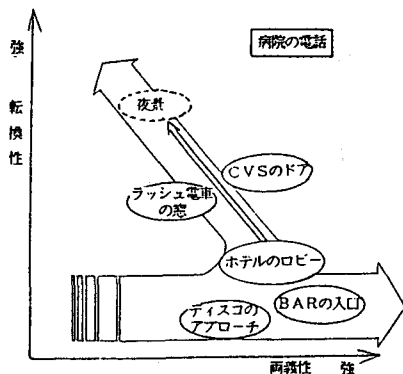


図-11 [仮境界]における両義性と転換性

5. 都市の時空間的特性による「境界」考察

では、次に、「意味づけ」の分析により、導き出された各モデルについて、都市の装置としての可能性を歴史的「境界」と比較しながら、時空間ごとに分析する。

5.1 時系列的考察—儀礼—

リーチによって提唱された儀礼における局面は、図-12のような3段階であり、「社会的境界を横断する行為」として定義されている⁹⁾。その局面は、①分離儀礼、②境界の儀礼、③統合の儀礼という段階を持つのである。歴史的「境界」の「橋」においては「橋参り」「橋渡し」などの通過儀礼の中にその局面はみられる。つまり、「橋」の境界性を明示している「モデルA」が人々に受け入れられる過程において「境界」が成立し、そのことを儀礼が明確化するのである。この観点からみると、「境界」においては、象徴性を著しく失っているため、社会的役割転換としての通過儀礼には遠いものとなっている。つまり、闇が絶対的なものでなく、主体別に現れてくる現在の状況では、「境界」のもつ儀礼的要素も、個別にならざるを得ないのである。「仮境界」では、「カエリタイ」型においてはリーチの局面と同じ段階を持つが、「カリソメ」型においては「仮日常」の持つ一時性により、「仮境界」を排除し「仮日常」に入る時点で、差異性の強調としての「境界」儀礼が成立しているのである。

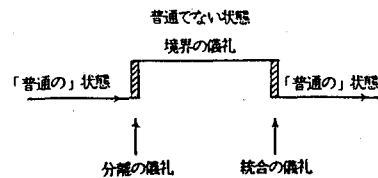


図-12 リーチによる儀礼の局面

5.2 アジール性の考察

網野によって提唱されている「境界」の場合は、「聖なる空間」として位置づけられており、その忌避性のために、呪術的なアジールとして機能したのである⁹⁾。そして、秩序の中に取り込まれていく過程につれて、「無縁」の原理は自覚され、宗教における位置づけとともに、法=制度的な概念に変化し、実利的なアジールになる。現代都市における「無縁」の場合は、「境界」が呪術的なアジール、「仮境界」が実利的なアジールに相当する。また、「境界」は、その呪術的なものにつながる性質を失いたため、体制には取り込みにくく、むしろ闇として日常を捉える「仮日常」のほうが、娯楽やレジャーのような都市の装置としてはっきりと位置づけられるのである。広場としてのアジール性の特徴を加味すると、「境界」は、アジール性における周縁部分に該当するものであり、アジール性を認識させる機能を持つ。

5.3 考察

ここで、アジール性と儀礼性の方向性を知るために、それぞれにおいて意味論的に評価することを考える。その結果を整理して、アジール性と儀礼性を両軸にとり、各例をプロットしたのが図-9、図-10である。これによれば、「境界」の「オネガイゴト」型は、その儀礼性とアジール性とが比例しているのだが、「イチシマエ」型は、逆に反比例的な要素も持っている。「仮境界」の「カリソメ」型は、似たようなものが多い中でも、小さな比例関係は持っており、転換すると儀礼性が小さくなるのは、主体性が小さくなるからである。

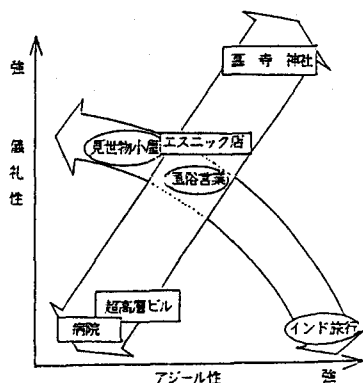


図-13 「境界」におけるアジール性と儀礼性

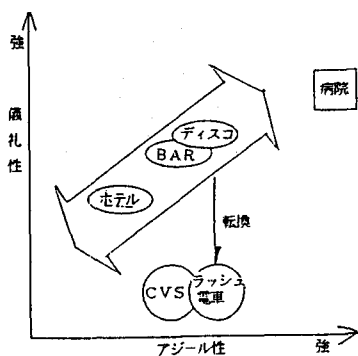


図-14 「仮境界」におけるアジール性と儀礼性

6. 結論と今後の発展方向—都市の新たな可能性

「境界」は、現在、その闇への媒介性を弱めているのであり、歴史的「境界」においては波紋のような同心円状だった世界は、身近なレベルから崩れている。その分断された「境界」の破片は、様々な仕掛けを使って人々を闇へひきずりこもうとしている。「墓」や「神社」などの既に転換性を獲得しているものは、原点としての両義性が弱まると同時に、忘却の彼方に向かっていく。逆に『AKIRA』に見られるように、オカルトブームや超能力というような現象の中心となる、二次元の世界などで生き生きとしているのが「境界」の現状である。

「境界」がドーナツ化すると、そのぽっかり開いた穴の中では、「仮境界」という“流動している都市”の歪みが、まるでフライパンの中のポップコーンのように個人的かつ一時的に現れるのである。我々は流れの中に身を任せていながらも、自らの位置を確認しようとするのであり、「仮境界」によって日常性を排除し、差異性を強調することによってわれわれの心の中の「境界性」を満たすのである。その設定—破壊プロセスは、都市が流動していく限り続くのである。しかし、破壊ができなくなると（入院など）、「仮境界」はその媒介性を増し、転換性が備わる。

では、これからの都市の「境界」はどのような方向性を持ち得るのであろうか。

①. 儀礼性の考慮——儀礼とは、象徴化への一段階であると同時に、共時的な空間・時間を創ることにより、個別の経験から全体的な経験の性質へと移行することができるのである。また、それに伴う一定の秩序化を進めることにより、混沌とした都市からのアジール性を得ることができ、都市装置として再生、位置づけできる。

②. 境界の要素と「仮境界」的要素との融合——境界はその円状の鎖から放たれ、一粒のポップコーンのように振舞おうとしているのであり、「エスニック料理店」のような「仮境界」的要素も持っている空間が注目されているのである。

③. 「境界」を<意味づけ>する人々の姿勢——「境界」は、空間としての仕掛けだけではなく、それに<意味づけ>する都市民の働きかけも必要である。人々は、都市に泳がされるのではなく、泳ぐことが必要なのである。つまり、はじけることで、都市から<意味>をハギ取り、自分なりのコスモロジー（現実を超えた虚の世界）を構築しなければならないのである。その視点、入口として、「境界」は有効なのである。

意味論的都市論のこれからの課題としては次の4点が考えられる。

- 「境界」を用いて、都市の心性の一面を読むことは可能である。
- 意味論的アプローチを用いて捉えないと不可解な事実とは、これから数多く見いだされる。
- 意味論的アプローチと機能論的アプローチとの、都市論における融合が必要である。
- 意味論においても。各主体が「どのような都市を“読む”か」という視点の段階ではなく、「なぜ、そのような“読み”をするのか」という視点に移行しなければならない。

参考文献

- (1) R. バルト／花輪光訳：記号学の冒険，みすず書房，1988. P. 98.
- (2) 瀬尾文彰：意味の環境論，彰国社，1981，p. 6.
- (3) 網野善彦：無縁・公界・楽，平凡社，1987.
- (4) 小松和彦：異人論，青土社，1985. 赤坂憲雄：異人論序説，砂子屋書房，1986.
- (5) 山口昌男：文化と両義性，岩波書店，1975.
- (6) 宮田登：妖怪の民俗学，岩波書店，1985. 飯島吉晴：竈神と廁神，人文書院，1986.
- (7) 小松和彦他：異界が覗く市街図，青弓社，1988. p. 20.
- (8) E. リーチ／青木保，宮坂敬造訳：文化とコミュニケーション，紀ノ国屋，1981.
- (9) 網野善彦：無縁・公界・楽，（前掲書）. 阿部勤也：中世の星の下で，影書房，1983.